

2022 年度 順天堂大学

【 講 評 】

例年通りの形式で出題された。第1問の小問集合は、昨年3題から4題に変更となっていたが、本年は3題に戻った。全体的な分量は昨年と同程度であるが、解きづらい問題が少なく、難易度はやや下がったといえる。

1次試験突破のためには、7割以上は得点したい。

- I** (1) 指数関数の計算問題である。計算量も少ないので、確実に得点したい。
 (2) 条件付き確率の問題である。設定も非常に単純で、計算量も少ないので、この問題は落とせない。
 (3) 3次方程式を誘導にしたがって解く問題である。 ω の使い方に気付けるかどうかで差がつく。
- II** 4次関数と直線に囲まれた部分の面積の条件から、直線の方程式を確定する問題である。設問による誘導に乗ることができればそれほど難しくはないが、意図がつかめなかった人にとっては解きづらい問題である。制限時間もあるので、(b)の途中くらいまでを得点したい。
- III** 空間ベクトルの平面と体積比に関する典型問題であった。やや文字が多く解きづらい部分もあるが、(3)までは確実に得点したい。(4)は問題文の表現が見慣れない形ではあるが、結局は体積比の典型問題であることに気づければ解けるだろう。

【 解 答 】

I 小問集合【やや易】

- (1) ア：－，イ：1，ウ：2，エ：4，オ：5，カ：1，キ：2，ク：2，ケ：3，
 コ：－，サ：1，シ：1，ス：2
- (2) ア：1，イ：2，ウ：1，エ：3，オ：9，カ：1，キ：4，ク：2，ケ：7，
 コ：9，サ：1，シ：6，ス：1，セ：3
- (3) ア：3，イ：2，ウ：7，エ：3，オ：－，カ：9，キ：－，ク：1，ケ：3，
 コ：2，サ：3，シ：9，ス：3，セ：9，ソ：3，タ：9，

II 積分法 (数学II) 【標準】

ア：1， イ：5， ウ：6， エ：5， オ：0， カ：9， キ：5， ク：1， ケ：5，
 コ：5， サ：3， シ：1， ス：8， セ：5， ソ：2， タ：3， チ：1， ツ：－，
 テ：9， ト：5， ナ：2， ニ：1， ヌ：6， ネ：5， ノ：2， ハ：3， ヒ：4

III ベクトル (数学B) 【標準】

- (1) $s \geq 0, t \geq 0, u \geq 0, s+t+u=1$
- (2) $\overrightarrow{OD} = \frac{s}{s+t+u} \overrightarrow{a} + \frac{t}{s+t+u} \overrightarrow{b} + \frac{u}{s+t+u} \overrightarrow{c}$, $OD : DP = 1 : 1 - (s+t+u)$
- (3) $\overrightarrow{OE} = \frac{t}{1-s} \overrightarrow{b} + \frac{u}{1-s} \overrightarrow{c}$, $AE : PE = 1 : s$
- (4) $\overrightarrow{OP} = \frac{4}{15} \overrightarrow{a} + \frac{1}{3} \overrightarrow{b} + \frac{1}{5} \overrightarrow{c}$

【 解 説 】

[I]

$$(1)(a) \quad f(a) = \frac{1}{2} \text{ のとき} \quad f(-a) = \frac{e^{-a} - e^a}{e^{-a} + e^a} = -f(a) = -\frac{1}{2}$$

$$\text{また, } f(a) = \frac{e^a - e^{-a}}{e^a + e^{-a}} = \frac{1}{2} \text{ より,}$$

$$2(e^a - e^{-a}) = e^a + e^{-a}$$

$$e^a = 3e^{-a} \quad \therefore e^{2a} = \frac{1}{3}$$

$$\text{よって} \quad f(2a) = \frac{e^{2a} - e^{-2a}}{e^{2a} + e^{-2a}} = \frac{3 - \frac{1}{3}}{3 + \frac{1}{3}} = \frac{4}{5}$$

$$(b) \quad g(x) = \frac{e^x + e^{-x}}{2} \text{ とおくと, } \begin{cases} g''(x) = g(x) & \dots\dots \textcircled{1} \\ \{g(x)\}^2 - \{g'(x)\}^2 = 1 & \dots\dots \textcircled{2} \end{cases} \text{ が成り立つ.}$$

($g(x)$ はカテナリーと呼ばれ, $\textcircled{1}$, $\textcircled{2}$ は覚えるべき性質である.)

このとき, $f(x) = \frac{g'(x)}{g(x)}$ であるので,

$$\begin{aligned} f'(x) &= \frac{g''(x)g(x) - \{g'(x)\}^2}{\{g(x)\}^2} = \frac{\{g(x)\}^2 - \{g'(x)\}^2}{\{g(x)\}^2} \quad (\because \textcircled{2} \text{ より}) \\ &= 1 - \left\{ \frac{g'(x)}{g(x)} \right\}^2 = 1 - \{f(x)\}^2 \end{aligned}$$

$$\text{よって, } f(b) = \frac{\sqrt{3}}{3} \text{ のとき} \quad f'(b) = 1 - \{f(b)\}^2 = 1 - \left(\frac{\sqrt{3}}{3}\right)^2 = \frac{2}{3}$$

$$(c) \quad 3\{f(x)\}^2 - 5f(x) - 2 = 0 \text{ のとき, } f(x) = A \text{ とおくと,}$$

$$3A^2 - 5A - 2 = 0$$

$$(3A+1)(A-2) = 0 \quad \therefore A = -\frac{1}{3}, 2$$

$$\text{また, } f(x) = \frac{e^x - e^{-x}}{e^x + e^{-x}} = A \text{ より,}$$

$$e^x - e^{-x} = A(e^x + e^{-x})$$

$$(1-A)e^x = (1+A)e^{-x}$$

$$e^x = \frac{1+A}{1-A} e^{-x} \quad \therefore e^{2x} = \frac{1+A}{1-A}$$

したがって,

$$A = -\frac{1}{3} \text{ のとき, } e^{2x} = \frac{1 + \left(-\frac{1}{3}\right)}{1 - \left(-\frac{1}{3}\right)} = \frac{1}{2} \text{ から, } x = \frac{1}{2} \log \frac{1}{2} = -\frac{1}{2} \log 2$$

$$A = 2 \text{ のとき, } e^{2x} = \frac{1+2}{1-2} = -3 < 0 \text{ となり, 不適}$$

$$\text{以上より} \quad x = -\frac{1}{2} \log 2$$

$$(2) \begin{cases} \text{コイン A の表と裏が出る確率は, それぞれ } \frac{1}{2}, \frac{1}{2} \\ \text{コイン B の表と裏が出る確率は, それぞれ } \frac{1}{3}, \frac{2}{3} \\ \text{コイン C の表と裏が出る確率は, それぞれ } \frac{1}{6}, \frac{5}{6} \end{cases}$$

(a) コインを 1 回投げて表が出たとき, 選んだコインが A である条件付き確率は,

$$\frac{(\text{コイン A を選んで表が出る確率})}{(\text{表が出る確率})} = \frac{\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{2}}{\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{2} + \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} + \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6}} = \frac{1}{2}$$

コインを 1 回投げて表が出たとき, 選んだコインが B である条件付き確率は,

$$\frac{(\text{コイン B を選んで表が出る確率})}{(\text{表が出る確率})} = \frac{\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3}}{\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{2} + \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} + \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6}} = \frac{1}{3}$$

(b) コインを 2 回投げて表→表が出たとき, 選んだコインが A である条件付き確率は,

$$\frac{(\text{コイン A を選んで表→表が出る確率})}{(\text{表→表が出る確率})} = \frac{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{2}\right)^2}{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{3}\right)^2 + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{6}\right)^2} = \frac{9}{14}$$

コインを 2 回投げて表→表が出たとき, 選んだコインが B である条件付き確率は,

$$\frac{(\text{コイン B を選んで表→表が出る確率})}{(\text{表→表が出る確率})} = \frac{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{3}\right)^2}{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{3}\right)^2 + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{6}\right)^2} = \frac{2}{7}$$

(c) コインを 3 回投げて表→表→裏が出たとき, 選んだコインが A である条件付き確率は,

$$\frac{(\text{コイン A を選んで表→表→表が出る確率})}{(\text{表→表→表が出る確率})} = \frac{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{2}\right)^2 \left(\frac{1}{2}\right)}{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{2}\right)^2 \left(\frac{1}{2}\right) + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{3}\right)^2 \left(\frac{2}{3}\right) + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{6}\right)^2 \left(\frac{5}{6}\right)} = \frac{9}{16}$$

コインを 3 回投げて表→表→裏が出たとき, 選んだコインが B である条件付き確率は,

$$\frac{(\text{コイン B を選んで表→表→表が出る確率})}{(\text{表→表→表が出る確率})} = \frac{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{3}\right)^2 \left(\frac{2}{3}\right)}{\frac{1}{3} \left(\frac{1}{2}\right)^2 \left(\frac{1}{2}\right) + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{3}\right)^2 \left(\frac{2}{3}\right) + \frac{1}{3} \left(\frac{1}{6}\right)^2 \left(\frac{5}{6}\right)} = \frac{1}{3}$$

(3) $x^3 + 9x + 6 = 0$ において, $x = y - \frac{k}{y}$ とおくと,

$$\left(y - \frac{k}{y}\right)^3 + 9\left(y - \frac{k}{y}\right) + 6 = 0$$

$$y^3 + 3(3-k)y + \frac{3k(k-3)}{y} - \frac{k^3}{y^3} + 6 = 0$$

これが $y^3 - \frac{l}{y^3} + 6 = 0$ の形を満たすのは $k=3$ のときで, このとき,

$$y^3 - \frac{27}{y^3} + 6 = 0$$

$$y^6 + 6y^3 - 27 = 0$$

$$(y^3 + 9)(y^3 - 3) = 0 \quad \therefore y^3 = 3, -9$$

(i) $y^3 = 3$ のとき $\left(\frac{y}{\sqrt[3]{3}}\right)^3 = 1$

よって, 1 の 3 乗根の一つである $\omega = \frac{-1 + \sqrt{3}i}{2}$ を用いると,

$$y = \sqrt[3]{3}, \sqrt[3]{3}\omega, \sqrt[3]{3}\omega^2$$

したがって,

$$y = \sqrt[3]{3} \text{ のとき, } x = \sqrt[3]{3} - \frac{3}{\sqrt[3]{3}} = \sqrt[3]{3} - \sqrt[3]{9}$$

$$y = \sqrt[3]{3}\omega \text{ のとき, } x = \sqrt[3]{3}\omega - \frac{3}{\sqrt[3]{3}\omega} = \sqrt[3]{3}\omega - \sqrt[3]{9}\omega^2$$

$$y = \sqrt[3]{3}\omega^2 \text{ のとき, } x = \sqrt[3]{3}\omega^2 - \frac{3}{\sqrt[3]{3}\omega^2} = \sqrt[3]{3}\omega^2 - \sqrt[3]{9}\omega$$

(ii) $y^3 = -9$ のとき $\left(\frac{y}{\sqrt[3]{-9}}\right)^3 = 1$

よって, $y = \sqrt[3]{-9}, \sqrt[3]{-9}\omega, \sqrt[3]{-9}\omega^2$

したがって,

$$y = \sqrt[3]{-9} \text{ のとき, } x = \sqrt[3]{-9} - \frac{3}{\sqrt[3]{-9}} = -\sqrt[3]{9} + \sqrt[3]{3}$$

$$y = \sqrt[3]{-9}\omega \text{ のとき, } x = \sqrt[3]{-9}\omega - \frac{3}{\sqrt[3]{-9}\omega} = -\sqrt[3]{9}\omega + \sqrt[3]{3}\omega^2$$

$$y = \sqrt[3]{-9}\omega^2 \text{ のとき, } x = \sqrt[3]{-9}\omega^2 - \frac{3}{\sqrt[3]{-9}\omega^2} = -\sqrt[3]{9}\omega^2 + \sqrt[3]{3}\omega$$

(i), (ii) より, $x^3 + 9x + 6 = 0$ の解は,

$$x = \sqrt[3]{3} - \sqrt[3]{9}, \sqrt[3]{3}\omega - \sqrt[3]{9}\omega^2, \sqrt[3]{3}\omega^2 - \sqrt[3]{9}\omega$$

お問い合わせは ☎0120-302-872

<https://keishu-kai.jp/>

[II]

条件 A : 曲線 C と直線 l が $x = x_1, x_2, x_3, x_4$ で交点を持ち、

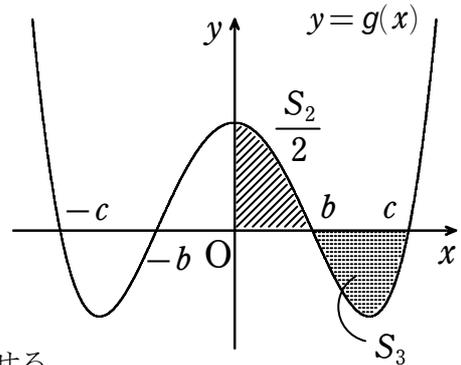
$$S_1 = S_3 \quad \dots\dots ①, \quad S_1 + S_3 = S_2 \quad \dots\dots ②$$

(a) ①, ② より $\frac{S_2}{2} - S_3 = 0$ である.

$y = g(x) = x^4 - \frac{18}{5}x^2 + a$ と $y = 0$ が条件 A を満たし、 $x_3 = b, x_4 = c$ のとき、 $g(x)$ が偶関数

であることから、図の斜線部が $\frac{S_2}{2}$ となり、 $\int_0^c g(x)dx = 0$ が成り立つ.

$$\begin{aligned} \text{よって, } \int_0^c g(x)dx &= \int_0^c \left(x^4 - \frac{18}{5}x^2 + a\right)dx \\ &= \left[\frac{x^5}{5} - \frac{6}{5}x^3 + ax\right]_0^c \\ &= \frac{1}{5}c^5 - \frac{6}{5}c^3 + ac = 0 \end{aligned}$$



$c > 0$ より、 $a = -\frac{1}{5}c^4 + \frac{6}{5}c^2 \quad \dots\dots ③$

また、 $g(x)$ は偶関数より、 $g(x) = 0$ の 4 解は $x = \pm b, \pm c$ と表せる.

よって、4 次の解と係数の関係より、

$$\begin{cases} -b^2 - c^2 = -\frac{18}{5} & \dots\dots ④ \\ b^2 c^2 = a & \dots\dots ⑤ \end{cases}$$

したがって、 $b > 0, c > 0$ に注意して ③, ④, ⑤ を解くと、

$$a = \frac{9}{5}, \quad b = \frac{\sqrt{15}}{5}, \quad c = \sqrt{3}$$

(b) $y = h(x) = x^4 + 4x^3 + \frac{12}{5}x^2 - \frac{6}{5}x + \frac{12}{5}$ を

$$h(x) = (x+d)^4 - A(x+d)^2 + B(x+d) + C$$

の形に変形するとき、 x^3 の係数を比較することで、 $4 = 4d \quad \therefore d = 1$

このとき、

$$\begin{aligned} h(x) &= (x+1)^4 - A(x+1)^2 + B(x+1) + C \\ &= x^4 + 4x^3 + (6-A)x^2 + (4-2A+B)x + 1 - A + B + C \end{aligned}$$

各項の係数を比較すると
$$\begin{cases} 6 - A = \frac{12}{5} \\ 4 - 2A + B = -\frac{6}{5} \\ 1 - A + B + C = \frac{12}{5} \end{cases} \quad \therefore (A, B, C) = \left(\frac{18}{5}, 2, 3\right)$$

よって、 $h(x) = (x+1)^4 - \frac{18}{5}(x+1)^2 + 2(x+1) + 3$

ここで、(a) の $y=g(x)=x^4-\frac{18}{5}x^2+\frac{9}{5}$ のグラフを x 軸方向に -1 だけ平行移動させて

$y=g_1(x)=(x+1)^4-\frac{18}{5}(x+1)^2+\frac{9}{5}$ とすると、 $y=g_1(x)$ と $y=0$ は条件 A を満たす。

$y=g_1(x)$ と $y=0$ を連立すると、

$$(x+1)^4-\frac{18}{5}(x+1)^2+\frac{9}{5}=0 \quad \therefore (x+1)^4-\frac{18}{5}(x+1)^2=-\frac{9}{5} \quad \dots\dots \textcircled{6}$$

よって、 $y=h_1(x)$ に対して条件 A を満たす直線の方程式は、 $y=-\frac{9}{5}$

また、 $\textcircled{6}$ の両辺に $2(x+1)+3$ を加えると、

$$(x+1)^4-\frac{18}{5}(x+1)^2+2(x+1)+3=2x+\frac{16}{5}$$

$$\therefore h(x)=2x+\frac{16}{5}$$

したがって、 $y=h(x)$ に対して条件 A を満たす直線の方程式は、 $y=2x+\frac{16}{5}$

(c) $y=f_1(x)=x^4-3x^2+a$ と $y=0$ に対して条件 A が成り立つのは、(a) と同様にして

$$\begin{cases} \int_0^c (x^4-3x^2+a)dx=0 \\ -b^2-c^2=-3 \\ b^2c^2=a \end{cases}$$

$b>0, c>0$ に注意してこれらを解くと、 $a=\frac{5}{4}, b=\frac{\sqrt{2}}{2}, c=\frac{\sqrt{10}}{2}$

このとき、 $y=f_1(x)$ と $y=0$ を連立すると、

$$x^4-3x^2+\frac{5}{4}=0$$

$$x^4-3x^2=-\frac{5}{4} \quad \therefore x^4-3x^2+2x+2=2x+\frac{3}{4} \quad (\because \text{両辺に } 2x+2 \text{ を加えた})$$

よって、曲線 $y=x^4-3x^2+2x+2$ に対して条件 A を満たす直線の方程式は、 $y=2x+\frac{3}{4}$

参考 4次方程式の解と係数の関係は、医学部入試でしばしば出てくるので、覚えておくとよい。

4次方程式 $ax^4+bx^3+cx^2+dx+e=0$ の4解を $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ とするとき、

$$\begin{cases} \alpha+\beta+\gamma+\delta=-\frac{b}{a} \\ \alpha\beta+\alpha\gamma+\alpha\delta+\beta\gamma+\beta\delta+\gamma\delta=\frac{c}{a} \\ \alpha\beta\gamma+\alpha\beta\delta+\alpha\gamma\delta+\beta\gamma\delta=-\frac{d}{a} \\ \alpha\beta\gamma\delta=\frac{e}{a} \end{cases}$$

が成り立つ。

参考 終わり

[Ⅲ]

面 ABC は、平面 ABC 上における三角形 ABC の周および内部と解釈して解答する。

(1) 点 P が面 ABC 上にあるとき、

$$\overrightarrow{AP} = x\overrightarrow{AB} + y\overrightarrow{AC} \quad (x \geq 0, y \geq 0, x + y \leq 1)$$

が成り立つ。よって、

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OP} &= \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AP} = \overrightarrow{OA} + x(\overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA}) + y(\overrightarrow{OC} - \overrightarrow{OA}) \\ &= (1 - x - y)\overrightarrow{a} + x\overrightarrow{b} + y\overrightarrow{c} \end{aligned}$$

$\overrightarrow{a}, \overrightarrow{b}, \overrightarrow{c}$ は一次独立であるので、 $\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{a} + t\overrightarrow{b} + u\overrightarrow{c}$ のとき s, t, u が満たすべき条件は、

$$s \geq 0, t \geq 0, u \geq 0, s + t + u = 1$$

(2) P が四面体 OABC の内部にあり、直線 OP と面 ABC の交点を D とするとき、

3 点 O, P, D は同一直線上より、

$$\overrightarrow{OD} = k\overrightarrow{OP} \quad (k: \text{実数})$$

とかける。よって、

$$\overrightarrow{OD} = ks\overrightarrow{a} + kt\overrightarrow{b} + ku\overrightarrow{c}$$

4 点 A, B, C, P は同一平面上であるので、係数の和が 1 より、

$$ks + kt + ku = 1 \quad \therefore k = \frac{1}{s + t + u}$$

$$\text{したがって} \quad \overrightarrow{OD} = \frac{s}{s + t + u}\overrightarrow{a} + \frac{t}{s + t + u}\overrightarrow{b} + \frac{u}{s + t + u}\overrightarrow{c}$$

またこのとき、

$$OD : DP = k : (k - 1) = 1 : 1 - (s + t + u)$$

(3) P が四面体 OABC の内部にあり、直線 AP と面 OBC の交点を E とするとき、

3 点 A, P, E は同一直線上より、

$$\overrightarrow{AE} = l\overrightarrow{AP} \quad (l: \text{実数})$$

とかける。よって、

$$\overrightarrow{OE} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AE} = \overrightarrow{a} + l(\overrightarrow{OP} - \overrightarrow{a}) = (1 - l + sl)\overrightarrow{a} + lt\overrightarrow{b} + lu\overrightarrow{c}$$

点 E は平面 OBC 上より、 \overrightarrow{a} の係数は 0 であるので、

$$1 - l + sl = 0 \quad \therefore l = \frac{1}{1 - s}$$

$$\text{したがって} \quad \overrightarrow{OE} = \frac{t}{1 - s}\overrightarrow{b} + \frac{u}{1 - s}\overrightarrow{c}$$

また、 $AE : PE = l : 1 - l = 1 : s$

(4) 内接円の半径を r とする. 点 O から面 ABC に下ろした垂線の足を Q とし, 右図のように三角形 ODQ に注目する. 点 O と面 ABC の距離が 20 であることと, (2) より

$$r : 20 = DP : OD \\ = 1 - (s + t + u) : 1$$

$$\therefore r = 20 - 20(s + t + u) \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

また (3) より, 点 A と面 OBC の距離が 15 であることから,

$$r : 15 = s : 1 \quad \therefore s = \frac{r}{15} \quad \dots\dots \textcircled{2}$$

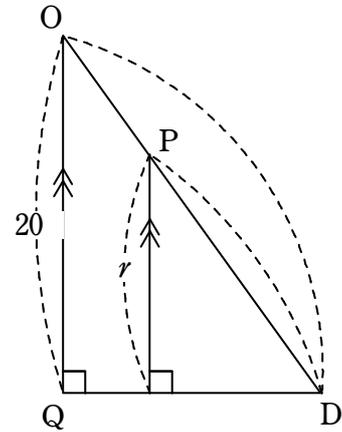
同様に点 B と面 OCA の距離が 12 , 点 C と面 OAB の距離が 20 であることから,

$$\begin{cases} r : 12 = t : 1 \\ r : 20 = u : 1 \end{cases} \quad \therefore \begin{cases} t = \frac{r}{12} \quad \dots\dots \textcircled{3} \\ u = \frac{r}{20} \quad \dots\dots \textcircled{4} \end{cases}$$

①, ②, ③, ④ を解くことで,

$$r = 4, \quad (s, t, u) = \left(\frac{4}{15}, \frac{1}{3}, \frac{1}{5} \right)$$

$$\text{したがって} \quad \overrightarrow{OP} = \frac{4}{15} \overrightarrow{a} + \frac{1}{3} \overrightarrow{b} + \frac{1}{5} \overrightarrow{c}$$



別解 ベクトルの等式からわかる体積比を公式として覚えておくと, 次のように解ける.

四面体 $ABCD$ の内部の点 P に対して,

$$a\overrightarrow{PA} + b\overrightarrow{PB} + c\overrightarrow{PC} + d\overrightarrow{PD} = \overrightarrow{0}$$

が成り立つとき,

$$\triangle BCD : \triangle CDA : \triangle DAB : \triangle ABC = a : b : c : d$$

が成り立つ.

このことを用いると, 次のように計算できる.

条件から

$$\triangle ABC : \triangle OBC : \triangle OCA : \triangle OAB = \frac{1}{20} : \frac{1}{15} : \frac{1}{12} : \frac{1}{20} \\ = 3 : 4 : 5 : 3$$

したがって,

$$3\overrightarrow{PO} + 4\overrightarrow{PA} + 5\overrightarrow{PB} + 3\overrightarrow{PC} = \overrightarrow{0} \\ -3\overrightarrow{OP} + 4(\overrightarrow{OA} - \overrightarrow{OP}) + 5(\overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OP}) + 3(\overrightarrow{OC} - \overrightarrow{OP}) = \overrightarrow{0} \\ 15\overrightarrow{OP} = 4\overrightarrow{OA} + 5\overrightarrow{OB} + 3\overrightarrow{OC} \\ \therefore \overrightarrow{OP} = \frac{4}{15} \overrightarrow{a} + \frac{1}{3} \overrightarrow{b} + \frac{1}{5} \overrightarrow{c}$$

別解 終わり